

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23330163

研究課題名(和文)ハンセン病研究の新視角 隔離の知から つながり の知へ

研究課題名(英文)New Perspectives on Hansen's Disease Studies: From a Scholarship of 'Segregation' to that of 'connection'

研究代表者

蘭 由岐子 (ARARAGI, Yukiko)

追手門学院大学・社会学部・教授

研究者番号：50268827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,500,000円

研究成果の概要(和文)：社会学、歴史学、文学、公衆衛生看護学の多領域の研究者が相互につながり、議論を共有した。中心的な作業として、史資料基盤構築のために療養所自治会所蔵の文書のアーカイブ化を行った。同時に、オーラル資料の収集・分析を行い、従来の一面的なハンセン病問題の語りに収斂されない病者や医療者の経験をあきらかにした。また、日本のハンセン病問題をグローバルなつながりの中で考察するために、国際研究会の開催、国際学会での報告をおこなった。よって、本研究はハンセン病問題の歴史的・社会的現実をオルタナティブな形で照射し、排除とつながりをめぐる新たな知の検討/創造という方向性を切り拓いてきた。

研究成果の概要(英文)：This research project brought together scholars of Hansen's disease from fields such as sociology, history, literature, public health nursing to work together and create discussion. The main part of the project consisted of the archivization of documents held by residents' associations of the sanatoria and the collection of oral histories in order to build a collection of bibliographical materials. Further, through our analyses, we shed light on the experiences of the sufferers and medical workers whose stories were elided in the dominant, one-sided historical narrative. Finally, in order to consider the place of the Japanese problems of Hansen's disease within a global context, we opened international research symposia and presented our work in international conferences. Thus, we explored new aspects of Hansen's disease studies in the humanities and social sciences through our focus on the historical and social realities of exclusion and inclusion.

研究分野：社会学

キーワード：ハンセン病 歴史 療養所 ライフストーリー アーカイブズ

1. 研究開始当初の背景

2001年のハンセン病国賠訴訟原告勝訴以降、ハンセン病問題は近現代の社会的権力構造のいわば極限例として捉えられ、「加害-被害」のアーリーナであることを出発点とされることが多くなった。この捉え方は、病者らの直面してきた社会的排除や差別等の問題の原因を追及・糾弾するとともに、病者にとっての問題を外在化し、彼らのエンパワーメントを促進するというきわめて大きな意義をもつ。しかし、それは、反面、病者に平板な「被害者像」を押しつける側面をもつ。研究代表者や分担者たちは、これまでの研究を通して、この、いわゆる「糾弾」の視点もつ限界を指摘し、それに代わる病者理解を模索してきた。その根本には、ハンセン病に罹患した人たちの存在のあり方とその歴史的現実を問う姿勢がある。

たとえば、1996年のらい予防法廃止以前から病者たちの「人生の物語」を聴いてきた研究代表者は、病者たちが隔離政策の結果、療養所内でのみ、悲嘆に暮れて生きてきたわけではなかったことをあきらかにしていたし、療養所における集会的実践というメゾレベルの研究もまた、被害者像を相対化していた。すなわち、病者たちは隔離の問題を乗り越えるために療養所内外の他者たちに働きかけ、主体的に社会関係を構築していたのである。さらに、療養所の設立過程について近隣地域社会に焦点をあてて考察した一連の歴史社会学的研究は、療養所が政策によって一義的に作られた「収容所」ではなく、地域と病者の願いとの葛藤のなかに現出した「アジール」であることを詳述していた。また、近代歴史学の成果が明らかにしたように、20世紀はじめの自由療養地構想は、病者たちのオールタナティブな療養形態を提示する政策提案でもあった。

つまり、病者たちは必ずしも「被害者」の地位に甘んじていたわけでもなかったし、ハンセン病政策が一方向的に隔離に邁進したわけでもなかったのである。

2. 研究の目的

本研究は、上記にみたような、これまでの研究をさらに発展させ、ハンセン病世界の、より豊饒なりアリティ構築をめざすとともに、ハンセン病問題に関する「知」のプラットフォームの生成をめざすことを企図するものであった。

具体的な課題は以下のようである。

(ア) 文書史資料の収集と分析

今後のハンセン病問題研究のための学際的なプラットフォーム整備のために、研究分担者のアーキビストを中心に、国内のハンセン病関連施設にある史資料を収集する。

(イ) オーラル資料の収集と解釈

ハンセン病問題の当事者 入所者、退所者、医師、看護師、職員、地域行政担当者（とりわけ保健師）、宗教者、支援者等々

へのさらなる聞き取りを通して、より詳細な情報を収集し、解釈する。それは個人のライフストーリーにとどまらず、療養所における集会的実践等までもひろがりをもつものとする。

(ウ) オーラル資料と文書史資料との融合

2つを相互に関連させながら、解釈を重ね、病者、療養所、および、ハンセン病問題それ自体のより豊饒なりアリティ構築をめざす。

(エ) 歴史実践の意味を問う

歴史学はもとより社会学、文学、公衆衛生看護学はハンセン病の歴史をどのように扱うのか。どう表象するのが「適切」なのか、について議論を深める。

(オ) 国外とのつながりをもつ

日本のハンセン病問題は、その隔離政策において特殊であることが強調されてきたきらいがあるが、果たしてそれは本当なのか。近代の歴史のなかにそれを今一度確認するとともに、現代世界のハンセン病問題の動向についても把握し、日本の経験を世界のそれにつなげる。

3. 研究の方法

文書・文献研究とライフストーリー等の聞き取り調査の両方もちいる。歴史学・文学専攻の者は前者をおもな研究方法として採用し、社会学・公衆衛生看護学では、後者をおもな方法として用いた。なお、保健師調査では質問紙による意識調査も企図した（が、今回は採用・実施できなかった）。

また、文書記録・保存の方法は、歴史学における標準的な資料整理の方法にのっとった。駿河療養所自治会所蔵の文書の調査に関しては、歴史学領域のメンバー（アーカイブズ学の専門家）からその方法について具体的な教示を受け、他領域のメンバーと協働で作業をおこなった。

さらに、ハンセン病問題の現状をとらえるために、各種催しにメンバーが参加したり、年2回開催した研究会にゲストスピーカーを招いて情報を共有したりした。

4. 研究成果

以下、メンバーのこれまでの研究活動実績をもとづいて研究成果を述べる。

(1) 国立駿河療養所自治会所蔵文書の調査

自治会の協力のもと、各領域のメンバー（研究代表者の蘭、研究分担者の中村、研究協力者の松岡、高野、佐藤、荒井）が書庫史資料の調査を進めた結果、主に1940年代以降の1170点の文書が確認された（調査した史資料のとりまとめは松岡による）。これらは、施設や全患協との交渉や、日常的な自治会運営に関連する記録などを含むもので、今後の具体的な活用基盤が構築されたといえる。これらは診療に関する医学的な記録は含まないが、個人情報を含み、活用する方法を含めて協議を要することとなる。駿河療養所

は傷痍軍人用施設として建設をされたこと、近隣に私立療養所神山復生病院が存在していたことという特徴をもつ。これらの特徴に十全に目配りしつつ、これらの史資料群を用いて、とりわけ戦後の入所者のありようを検討することができるようになったといえる。

さらに、文学に特化したかたちで、佐藤が駿河療養所の同人誌『山椒』の総目次を作成した（佐藤健太 2013「駿河山椒同人発行『山椒』創刊号～第35号（1964年2月～1977年9月）総目次」）。

これらの史資料群を指して、狭義の‘知’のプラットフォームと呼ぶことができよう。

(2)戦後療養所の入所者による各種殖産事業に関する調査

ハンセン病療養所各園の入所者は、医療環境や社会状況など、戦後、生活世界の大きな変化に直面した。そして、療養所を退所する「社会復帰者」が増加した一方で、病気の後遺症や社会に根強くある偏見・差別のために、多くの入所者は療養所にとどまることを余儀なくされた。研究分担者の坂田は、療養所入所者がそうした変化の中でやってきた営みの一端を、入所者組織による殖産事業をもとに分析した。そこからは、療養所入所者が直面したさまざまな困難（経済的問題、園内共同体の解体・縮小など、戦後日本の社会変動と連動する形で、療養所世界で発生した変化）とともに、それらの営みを通して、彼らが生活を確保し、近隣地域をはじめとした療養所外部の他者との間で構築してきた関係性が明らかになった。

(3)国立療養所の視覚不自由者たちによる「盲人会」組織の活動に関する調査

療養所各園では、戦後、病気によって視覚に重い障害をもった人々が「盲人会」と呼ばれる組織を結成し活動してきた。研究分担者の坂田は、それらが結成された文脈や活動の内容・方向性をたどることで、療養所の入所者の間で生じたさまざまな差異や利害対立といった複雑な人間関係のありようを検討した。そこからは、ハンセン病療養所における「障害」を巡る排除や差別の問題とともに、そうした差異を超えて入所者たちがはぐくんできた関係性が浮き彫りになった。

(4)近代日本の医学・医療・疾病に関するアーカイブズ学研究への接続

ハンセン病に関する人文・社会学的研究を進めてゆくなかで、研究者が共通して直面する問題として、資料へのアクセス制限や病者のプライバシーへの配慮がある（すなわち、前述の成果(1)とも関連する）。研究分担者の廣川は、大阪大学アーカイブズ所蔵大阪皮膚病研究所関係文書の整理と分析などの経験をふまえて、日本における医療記録のアーカイブズ論の確立を企図し、資料所蔵機関・研究者・アーキビストとの協働によって、ハン

セン病関係資料を含むさまざまな医療記録をいかに残し、活用してゆくかについて積極的かつ実践的な提言を行った。

(5)ライフストーリーの聞き取り調査

研究代表者の蘭が社会復帰者と療養所勤務の経験がある医師に、研究分担者の井上が保健師複数名に聞き取りを行った。蘭の聞き取った社会復帰者の語りからは、在宅診療を行ってきた大学病院につながってはいたものの、やはり、貧しい医療ケアのもとでハンセン病とともに生きていかなばならなかった現実と、療養所入所経験がトラウマティックな経験であったこと、そして、それゆえに、高齢期を迎えた今日、療養所に再入所して余生を送ることも困難になっているという、社会復帰者の直面する現状があきらかになった。

井上は、かつてみずから療養所入所を希望してきた病者の収容に係わったことのある保健師に聞き取りをした。その際、その保健師に対する聞き取り過程は、保健師の後輩である井上＝聞き手・調査者に、先輩＝語り手・被調査者から「伝える形」として体験を語るものであることに気づき、聞き取り経験のほとんどなかった井上は、語られていることの重みや聞き取りという方法の難しさと保健師という職能の社会的役割について自身に問うこととなった。訴訟以降、過去のハンセン病施策が「糾弾」の対象となっており、かつ、実際に病者収容に関わった保健師のほとんどが鬼籍に入らんとしている今日、どのように政策に係わった医療者にアクセスするかは非常に難しい問題であり続けている。

また、井上と蘭は、療養所の近隣地域で病者や退所者と相互行為を行った経験をもつ地域住民に対して、その家系につながるひとびとと療養所との関係を含めてインタビュー調査をおこなった。また、病者の遺族にも会い、病者の家族の思いを聞き取った。これらは、井上の保健師調査の予備調査として遂行した。

研究分担者の山田は、ハンセン病問題の啓発フィルム分析から、啓発の物語を語る場合であっても、語るトピックに関連した個人の経験の語り（ライフストーリー）が意図せずして表されていることを例証した。

(6)文学領域における研究と実践

研究協力者の荒井は、戦後の療養所のなかで、病者自身の手によって創刊・運営された文芸同人雑誌について、掲載作品の調査をおこなった。中心的な対象は、1950年12月創刊1953年夏に廃刊した『灯泥』である。この同人誌には、ハンセン病国賠訴訟原告団の中心的人物であった筈雄二氏や国本衛氏がおもにかかわっていた。これを戦後の療養所における「人権」概念の広がりを考察するための重要資料と位置づけた上で、その内容について検討した。あわせて、「マイノリティ

の自己表現」に関する研究として、「心を病む人びと」とアート活動について調査した。

研究分担者の佐藤は、駿河療養所の同人誌『山椒』の総目次を作成し(既述)、そこに関わった同人たち(病者や医師など)の作品を解説・解説するとともに、「ハンセン病文学読書会」を主宰し、東京と駿河療養所で読書会を開催した。高野は、佐藤とともに読書会の運営を担い、風見治の小説「鼻の周辺」に関連して形成外科に関する研究をすすめた。佐藤、高野は著者風見治に会い、その創作過程について聞き取りをおこなった。

研究協力者の田中は、自身の博士学位論文をふまえて、療養所内で文学活動が果たした役割をあきらかにするとともに、大島療養所の長田穂波の本を英訳し米国で出版したエリクソン夫人について調査した。また、北條民雄の遺族と交流しながら研究をすすめた。

(7)戦後障害者運動史の再検討に関する研究

研究協力者の荒井は、ハンセン病問題を障害者運動の歴史のなかで考察するため、戦後障害者運動史を検討している。とりわけ1970～80年代の日本の障害者運動史の再検討のために、実際に運動に携わった人びとから聞き取りをした。

(8)国立療養所大島青松園における史料調査とそれにもとづく考察

研究分担者の石居は大島青松園のキリスト教信徒団体「霊交会」の教会堂に残る史料を中心に、療養所の創設以来、療養者が療養所内外のさまざまな個人や団体とどのような関わりをもってきたのかについて、分析を行った。すなわち、瀬戸内三園(大島青松園、長島愛生園、邑久光明園)に収容された病者と療養所を「抱える」地域の生活者の双方が、自らの生の「安寧」を担保するべく、生きるための環境をどのように展望したのかを跡づけるとともに、そこにどのような生きるための模索があったのかを考察した。

(9)国際研究会の開催と海外研究者・回復者との交流

2012年12月に、学会参加のために来日していた海外のハンセン病問題研究者を関西に招き、研究会を開催した。ノルウェーベルゲン市のハンセン病ミュージアムのディレクターSigurd Sandmo氏は、そのミュージアムの展示研究の取り組みについて報告した。オーストラリアのJo Robertson氏は、インドの「未感染児童」をめぐる英国ミッションリーのまなざしについて、当時の資料にもとづき報告した。坂田と蘭は、2013年9月ベルゲンのハンセン病ミュージアムとベルゲン市のアーカイブズを視察した。

また、2013年9月の国際ハンセン病学会(ベルギー・ブリュッセルにて開催)ほかに蘭、廣川、田中が参加・報告し、海外のハンセン病問題の歴史学研究者、支援者および回復者

たちと交流した。

(10)療養所開設以前の沖縄における病者の経験に関する研究

研究分担者の中村は、長年にわたる青木恵哉の研究を継続し、深化させた。具体的な取り組みとして、療養所開設以前の沖縄MTLの活動の考察をあげることができる。さらに、病者の経験を手がかりに家族や生活世界について理論的検討をおこなった。

(11)療養所患者自治会の取り組みに関する研究

研究分担者の松岡は、療養所入所者を被害のストーリーに収斂させないための視点として療養所内「自治」に注目し、戦前の療養所での自治会機能の発出とその機能について考察した。とくに、総力戦期における長島愛生園自治会機能について、長島事件(1936年)後の田中文雄(本名・鈴木重雄、のちに故郷に社会復帰し町長選に出馬)の入園と役員としての活躍を軸に、入所者と職員とが連携して療養所における生活環境を構築していったようすを詳細にあきらかにした。

(12)ハンセン病市民学会における分科会の主催

研究分担者の廣川がコーディネーターとなり、2013年の熊本大会にて、分科会「ハンセン病問題研究のあらたな地平へ—病者の『生』をとらえるために」を主催し、蘭、松岡、田中、高野が報告した。本分科会のテーマは、本科研でいう「知」のプラットフォーム(広義)の一例を提示したと思われる。

翌2014年の群馬草津大会では、分科会「ハンセン病文学と読書会の可能性」を研究協力者の佐藤がコーディネートおよび報告し、研究分担者の坂田が司会を担当した。

(13)ハンセン病者に対する排除・差別問題の検討

西尾は、自著『ハンセン病の「脱」神話化』で、病気をめぐる3つの表象(疾患、病気、病い)を手がかりに、ハンセン病(「病い」としての)の根幹にある排除・差別の問題に照明をあて、その低減のための方策として、学生たちの国際ワークキャンプによるハンセン病のコノテーションの転換を提唱した。この西尾自身の成果について、メンバーで合評した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計18件)

山田富秋 2015 「映像資料における『当事者性』の問題」『社会学評論』第65巻、465-485.

中村文哉 2015 「沖縄MTLの発足と青木恵哉」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第21号、pp.103-133.

田中キャサリン 2015 「ロイス・ジョン

ソン・エリクソン夫人と長田穂波 キリスト
教宣教師と癩文学の普及」『大手前大学論集』
15、pp.119-147 .

石居人也 2014 「隔離される者/する者にと
つての『地域』—瀬戸内海のハンセン病療
養所をめぐる」『人民の歴史学』(東京歴史
科学研究会)第 201 号、査読なし、pp.15-27 .

廣川和花 2014 「医学史・日本史・アーカ
イブズのあいだで」『科学史研究』271 号、査
読なし、pp.293-295 .

廣川和花 2014 「医学史資料のアーカイブ
ズ化の課題と可能性」『生物学史研究』91 号、
査読なし、pp.53-58 .

蘭由岐子 2013 「ハンセン病者の医療ケア
における困難をめぐる」『現代の社会病理』
第 28 号、査読なし、pp.21-39 .

中村文哉 2013 「記憶の身体性と世界体験
の自己所与性 記憶の社会理論の三つの問
題系」『西日本社会学年報』第 11 号、査読
あり、pp.7-21 .

中村文哉 2013 「ハンセン病罹患と『本質
意志』の行方—ハンセン病者が家族を形成す
ることの意味をめぐる」『社会分析』(日本
社会分析学会)第 40 号、査読あり、pp.40-60 .

廣川和花 2013 「ハンセン病研究のパー
スペクティブ: 書評へのリプライにかえて」
『歴史科学』211 号、査読なし、pp.12-17 .

松岡弘之 2013 「総力戦下のハンセン病療
養所」『部落問題研究』第 205 号、査読あり、
pp.100-121 .

蘭由岐子、出口弘、喜多一、日置弘一郎、
渡邊聡 2011 「シンポジウム 人間に関する
研究の倫理指針の諸問題」『社会・経済シス
テム』第 32 号、査読なし、pp.13-46 .

ARARAGI, Yukiko 2011 Stigma faced by
Survivors of Hansen's disease in Today's
Japan: form an Examination of
Discriminative messages sent to
Kikuchikeifuen Sanatorium, 2010 *World
Forum on Hansen's disease*, Hanvit
Welfare Association, pp.371-377 .

〔学会発表〕(計 12 件)

石居人也 2014 「隔離される者/する者にと
つての『地域』—瀬戸内海のハンセン病療
養所をめぐる」東京歴史科学研究会第 48
回大会、2014 年 4 月 27 日、早稲田大学: 東
京 .

佐藤健太 2014 「特別病室はいかに描かれ
たか 名草良作「生きものの刻」の改稿過程」
第 10 回ハンセン病市民学会分科会 C 「ハン
セン病文学と読書会の可能性」、2014 年 5 月
11 日、国立療養所栗生楽泉園(草津町) .

HIROKAWA, Waka, 2014 New
Perspective on the History of Hansen's
Disease(Leprosy) in Modern Japan:
Beyond Commemoration and Denunciation,
Council on East Asian Studies at Yale
University, 2014 年 3 月 26 日、Yale
University : New Haven . (招待講演)

ARARAGI, Yukiko, 2013 Living with
Ambivalence : The Experiences of Japanese
Hansen's Disease survivors and their
Families in the Era of Reconciliation, The
18th International Leprosy Congress, 2013
年 9 月 18 日、Management Centre Europe:
Brussels.

HIROKAWA, Waka, 2013 "A History
Torn Between 'Providing Relief' and
'Inflicting Harm': Missionary Work for
Hansen's Disease Sufferers and Local
Communities in Modern Japan from the
1880s to the 1940s." The 18th International
Leprosy Congress, 2013 年 9 月 17 日、
Management Centre Europe: Brussels.

蘭由岐子 2013 「語りを読むということ
'宝'発掘のひとつの方法」第 82 回瀬戸内
集談会、2013 年 7 月 4 日。(招待講演)岡山
いこいの村: 瀬戸内市 .

石居人也 2013 「隔離政策下のハンセン病
療養所における信仰と交流 香川県大島の
キリスト教にみる」第 71 回経済史研究会、
2013 年 6 月 8 日(招待講演)大阪経済大学:
大阪 .

坂田勝彦 2012 「質的研究における『学際
性』と若手研究者のキャリアパス ハンセン
病問題研究のフィールドから」(テーマセッ
ション「学会活動と論文投稿のノウハウを公
開・共有しよう 研究活動支援と学会の自己
認識のために」)第 60 回関東社会学会大会、
帝京大学: 東京 .

廣川和花 2011 「疾病・医学・医療の歴史
と地域社会 近代日本のハンセン病問題を
素材に」『歴史科学協議会大会』、2011 年 11
月 27 日、立教大学: 東京。(招待講演) .

〔図書〕(計 15 件)

坂田勝彦 2015 (近刊)「人生を物語る
ということ 老いとともにあるハンセン病
療養所入所者の生活史から」浮ヶ谷幸代編
『苦悩とケアの人類学』世界思想社 .

Hirokawa, Waka 2015 forthcoming "A
Colony or A Sanitarium?: A Comparative
History of Segregation Politics of Hansen's
disease in Modern Japan," in David G.
Wittner and Philip Brown eds., *Crossing
Boundaries, Crossing Cultures: Sciences,
Technology, and Medicine in the Emergence
of Modern Japan*, New York: Routledge.

Tanaka, Kathryn 2015 forthcoming "They
are not Human: Hansen's Disease and
Medical Responses to Hojo Tamio," in
David G. Wittner and Philip Brown eds.,
*Crossing Boundaries, Crossing
Cultures: Sciences, Technology, and Medicine
in the Emergence of Modern Japan*, New
York: Routledge.

廣川和花 2014 「ハンセン病の歴史と近代
大阪」木戸衛一編『平和研究入門』大阪大
学出版会、pp.126-139 .

佐藤健太・谷岡聖史編 2015 『ハンセン病文学読書会のすすめ』、ハンセン病文学読書会。

高野弘之 2015 「同時代の雰囲気をつかむために—読書会とハンセン病アーカイブズの活用」佐藤健太・谷岡聖史編 2015 『ハンセン病文学読書会のすすめ』、ハンセン病文学読書会、pp.36-37。

坂田勝彦,2015「手がかりとして読む、ドラマとして読む」佐藤健太・谷岡聖史(編) 『ハンセン病文学読書会のすすめ』 pp52-53。

中村文哉 2014 「沖縄ハンセン病患者の排除と移動 療養所なき時代における沖縄ハンセン病問題の位相」谷富夫・野入直美・安藤由美編 『持続と変容の沖縄社会』ミネルヴァ書房、pp.176-197。

石居人也 2014 「社会問題の『発生』」『岩波講座 日本歴史』第16巻、pp.281-314。

廣川和花 2014 「分科会報告『ハンセン病問題研究のあらたな地平へ—病者の「生」をとらえるために』：趣旨説明」『ハンセン病市民学会年報2013』、解放出版社、pp.176-181。

蘭由岐子 2014 「分科会報告『ハンセン病問題研究のあらたな地平へ—病者の「生」をとらえるために』：社会学における研究実践について」『ハンセン病市民学会年報2013』、解放出版社、pp.182-189。

松岡弘之 2014 「分科会報告『ハンセン病問題研究のあらたな地平へ—病者の「生」をとらえるために』：ハンセン病問題と歴史学研究」『ハンセン病市民学会年報2013』、解放出版社、pp.189-196。

田中キャサリン 2014 「分科会報告『ハンセン病問題研究のあらたな地平へ—病者の「生」をとらえるために』：戦前日本のハンセン病療養所における短歌による交流」『ハンセン病市民学会年報2013』、解放出版社、pp.197-206。

高野弘之 2014 「分科会報告『ハンセン病問題研究のあらたな地平へ—病者の「生」をとらえるために』：ハンセン病問題研究とアーカイブズ」『ハンセン病市民学会年報2013』、解放出版社、pp.207-216。

荒井裕樹 2014 「対談/否定された存在からありのままの『生の肯定』を求めて 青い芝の会『行動綱領』をめぐる」『季刊福祉労働』No.144、現代書館、pp.98-116。

〔産業財産権〕
該当せず

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蘭 由岐子 (ARARAGI, Yukiko)
追手門学院大学・社会学部・教授
研究者番号：50268827

(2) 研究分担者

山田 富秋 (YAMADA, Tomiaki)
松山大学・人文学部・教授
研究者番号：30166722

中村 文哉 (NAKAMURA, Bun'ya)
山口県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：90305798

坂田 勝彦 (SAKATA, Katsuhiko)
東日本国際大学・福祉環境学部・准教授
研究者番号：60582012

廣川 和花 (HIROKAWA, Waka)
大阪大学・適塾記念センター・准教授
研究者番号：10513096

石居 人也 (ISHII, Hitonari)
一橋大学大学院・社会学研究科・准教授
研究者番号：20635776

井上 清美 (INOUE, Kiyomi)
神戸常盤大学・保健科学部・教授
研究者番号：20511934

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

荒井 裕樹 (ARAI, Yuki)
二松学舎大学・文学部・特別任用常勤講師
研究者番号：90749847

田中 キャサリン (TANAKA, Kathryn)
大手前大学・総合人文学部・講師
研究者番号：50740049

佐藤 健太 (SATO, Kenta)
編集者、ハンセン病文学読書会主宰者

松岡 弘之 (MATSUOKA, Hiroyuki)
大阪市史料調査会・調査員

高野 弘之 (TAKANO, Hiroyuki)
埼玉県立文書館・嘱託職員

西尾 雄志 (NISHIO, Takeshi)
日本財団学生ボランティアセンター・センター長

小林 真美 (KOBAYASHI, Mami)
旭川荘厚生専門学院・講師